

奈良県立医科大学 学報

新年のご挨拶



学長 吉田 修

2003
JAN

vol.3

CONTENTS

学長挨拶 (新年を迎えて)	表紙
ホオジロ通信 (吉岡病院長)	2
公開講座「くらしと医学」	3
研究紹介	4-6
平成14年度補正予算・文部科学大臣表彰 中島佐一学術研究奨励賞募集	7
看護実習を終えて	8
看護短期大学の公開講座 全国公立大学附属病院看護部長協議会開催	9
チュートリアル教育の現場から	10-11
病院ボランティア・デイルーム美術館	11
教授会レポート	12-13
周産期医療センター開設・第56回解剖慰霊祭の開催 再生医療研究会開催・編集後記	14

明けましておめでとうございます。

最近『知の三角形』という言葉を見ました。それは専門知識を有し、広く社会に通用する人材の育成すなわち[知の継承(高等教育)]、国内外に通用する普遍的な真理を探究する[知の創造(学術研究)]、及び地域に生まれ地域に役立つ活動すなわち[知の活用(地域貢献)]を結びとできる三角形であります。これをそのまま公立大学の役割と見なすことができます。

本学の五十有余年におよぶ歴史を顧みるとき幾度か転換期がありました。今から何年か後で振り返ってみると現在も大きな変革期と見なされることと思います。時代の大きなうねりの中であって、大学、そして医学・医療の本質を忘れることなく、先に述べた公立大学の役割をしっかりと認識して、改革に取り組みなければなりません。現在の取り組み状況から判断して平成16年4月までに、大学院改革、看護短大の四大化、教育改革、病院の整備は一段落すると思いますが、その先にはもっと大きな改革が迫っております。それは国公立の大学や病院の独立行政法人化に伴う改革です。

この様に考えますと平成15年という年は、本学にとって大変重要な年になります。

私は学長就任以来一貫して皆様に要望していることがあります。それは、『ものごとを決める第一の判断基準を“真に本学の将来のためになるかどうか”にして欲しい』ということであり、一層のご協力とご活躍を期待しております。

皆様のご健康とご多幸をお祈りし新年のご挨拶といたします。

第二本館C病棟完成を前にして

附属病院長 吉岡 章



明けましておめでとうございます。

本学附属病院は第二本館C病棟完成の年を迎えました。本建築は平成13年春以来、数多くの関係者の決断と御尽力の下に総額136億円の県民の財政負担の上にもまもなく完成いたします。これで昭和56年のA病棟の竣工以来、20年余を経て、ようやく21診療科10中央部門、計900床の医科大学附属病院としてその偉容を現わすこととなります。新病棟は、最新の医療機器を備え、140万県民の医療に対する期待と信頼に十分応えうるものと確信しています。

平成16年度には、大学院の再編・整備、医学部看護学科（4年制）の開設、そして新たな医師臨床研修制度の導入、という3大事業と相まって、当附属病院が、さらに大きく発展し、名実共に県を代表する医学・医療センターとしてフルにその機能を発揮することこそが、私ども職員一同に課せられた使命であります。

病院の毎日は体や心に病を持つ患者さんや



ホオジロ

その家族の方々と共に始まります。私自身、医師となってから、急性B型肝炎で2か月（昭和50年）、椎骨動脈瘤破裂予防結紮術での1か月（平成6年）の2回の入院経験があります。辛い痛みやどうしようもない不安を抱えながらの入院生活では、夜は「今日一日命を永らえることができた安心感」と共に眠りにつき、朝は白々明けと共に「今日も一日生きるぞ」と自らの命の存在を確めたものでした。この折、「おはようございます」という看護師さんの朝一番の元気な声と笑顔が何よりの励みでした。そして、主治医の「今日はいかがですか？」との落ち着いた声と微笑が、着実な回復を約束してくれているようで、とても安心したものでした。

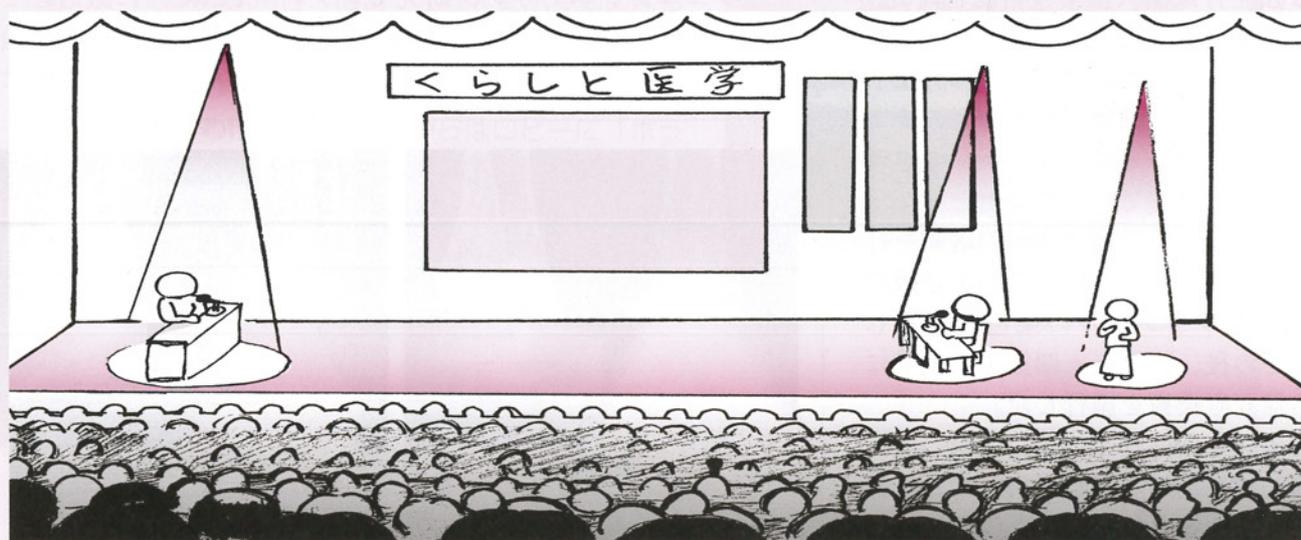
最新の機器と新しい建物は、診断と治療の飛躍的な進歩を約束し、ひいては患者さんの居住性を大きく改善するものです。医師や看護師の新しい研修や教育は制度面からもさらに充実して参ります。最先端の医学・看護学の知識と医療技術は必ずや患者さんの病という苦痛からの解放に役立つに違いありません。そして、そこに私ども、職員が温かい心をもって一人一人に接し、朝晩のあいさつをはじめとして、思いやりのあることばをおかけすることこそが、良質な医療の提供に最も基本的、かつ、不可欠な要素だと考えます。建物の完成と制度の改善を目前にひかえ、今一度、医療人の原点に立ちかえり、患者さんに真心で接するという気持を再確認し、来るべき大飛躍に備えようではありませんか。

『くらしと医学』

平成6年度に50周年記念事業の一環として始まったこの公開講座も今回で9回目となりました。かねてより奈良市だけでなく南の方でも開催できないかという要望が多数ありましたので、本年度は11月16日に平成14年度前期として初めて地元橿原市で行いました。

吉田修学長の挨拶に続き、座長三井宜夫教授の演者紹介の後、古家仁教授が『麻酔は怖くない』と題して講演を行いました。6種類の薬草を用いて世界で初めて全身麻酔を実施した華岡青州の話や麻酔というのは手術の前に一回するだけだと思っていたら、手術中に脳波モニターや麻酔薬の血中濃度をコンピューターで調節したりして、呼吸・心拍数・血圧や体温を一定に管理している話などは、年配の人がふむふむと頷きながら聞き入っておられました。医大病院なら安心だという気持ちを持たれたことと思います。

引き続き、座長の中村忍教授から「教育や研究には非常に厳しいが、普段はとっても優しい人」と紹介された宮川幸子教授が『光と皮膚』と題して講演を行いました。専門家でもなかなか見ることができない事例などをスライドで紹介しながら、光（紫外線）の有益性や光線皮膚症をはじめとする症状および予防対策等についての説明がありました。皮膚の働きが外界の刺激から身体を守る役目をしているとか、別の治療のために服用している薬や化粧品の成分が原因で皮膚病になるとか、紫外線が治療に使われている（赤外線ならわかるが）とか意外な話もありました。



そして、10分間休憩の後、座長の大崎茂芳教授より「論文を書くのが趣味」と紹介された東野義之教授が『動脈の加齢変化—日本人とタイ人』と題して講演を行いました。動脈に蓄積されるカルシウムの含量は、加齢に伴い一様に変化するのではなく、上肢よりも下肢の方が増加しやすく、年齢も60歳前後から増える傾向にある。また日本人とタイ人を比較するとタイ人の方が10歳から20歳だけ早く動脈硬化を生じ、動脈の変化が平均寿命にも関係していると言える等の話がありました。

以上のように、質疑応答も含め、約45分間ずつ講演をしていただきました。この公開講座の目的は、本学における研究成果等を直接県民に情報提供し、健康を守るために少しでも役立ててもらうことで地域貢献をしていくことです。今回の講師の先生方もできるだけわかりやすく聞いてもらうため資料作りから工夫していただきました。

なお、14年度後期公開講座は15年2月22日に奈良県文化会館で開催します。講師は、一般教育から豊田剛哲学教授、基礎から市島國雄病理学第一講座教授、臨床から大石元腫瘍放射線医学教授です。

(総務課)

骨と関節への再生医療の臨床応用

整形外科学講座 教授 高倉 義典

再生医療には生殖細胞をはじめとするあらゆる細胞に分化する能力を有する胚性幹細胞（ES細胞）から種々の組織や臓器を再生させる方法と、ある程度の分化の方向が決まっている組織幹細胞（または体性幹細胞）から特定の組織を再生させる方法がある。組織幹細胞は間葉系、神経系、造血系、表皮系など多くの組織内に存在する。今日まで当教室では後者のうち、骨髄細胞中に含まれる間葉系幹細胞（MSC）を用いて骨を再生させる一連の研究を行ってきた。この度、医の倫理委員会の承認を得て、患者の骨髄を採取してセルプロセッシングセンター（CPC）で培養し、種々の症例に対して臨床応用を行った。術後経過期間は短期ではあるが、拒絶反応や感染の兆候もなく、この操作を行わない症例と比較して、疼痛の消失期間やX線学的所見からも良好な結果を得ている。

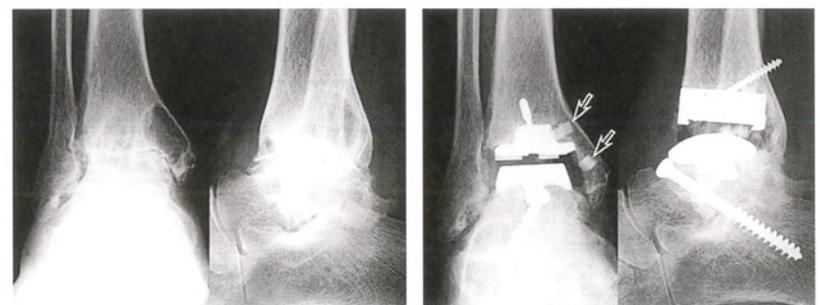
1. 人工足関節置換術への応用

人工足関節は欧米において、多数の関節が開発されて臨床応用されたが、種々の原因により5年以上の術後結果は芳しくなく、ほとんどの人工関節の製作が中止された。一方で、股関節および膝関節の人工関節の成績は長期経過においても良好で、広く一般的に行われている。

人工足関節の成績を上げるためには、骨との接触面をビーズ加工し、その間隙および表面に新生骨を再生させてから置換すれば、骨折治癒過程と同様に人工関節と骨との結合が短期間で容易に起こることが考えられた。そこで、医の倫理委員会の承認を得て、再生骨組み込み型人工足関節の臨床応用を行った。

対象患者は変形性足関節症例9例9関節、関節リウマチ2例2関節であった。置換術の1カ月前に手術室で骨盤から骨髄を10mlと、培養のための培地に使用する血清のために400mlの血液を採取し、直ちにCPCである独立行政法人産業技術総合研究所・ティッシュエンジニアリング研究センター（TERC）に搬送して培養を開始した。TERCでは患者血清を添加した培養液と、ガンマ線滅菌済みの牛血清（プリオン未発生地のもの）を添加した培養液が入った2種類のフラスコ内で、まず2週間の初期培養を行った。その期間中に各種のウイルス、細菌、真菌などのチェックをするとともにトリプシンで処理した。2次培養ではアルミナセラミック人工足関節上で約2週間の培養を行い、終了前には再生骨の状態を顕微鏡検査およびサンプルの染色で確認した。その後、この人工関節を当大学に持ち帰り置換術を施行した。

術後経過期間は短いですが、従来の症例に比して早期に疼痛が消失して、X線像からも関節と母床の骨との間の一部で新生骨の迷入が観察され、良好な経過を辿りつつある。



術前

術後2ヶ月

図 62歳、男性、関節リウマチ

再生骨組み込み人工足関節置換術および再生骨組み込みハイドロオキシアパタイトの充填（矢印、術後2ヶ月で周囲との一体化が認められる）

2. その他の整形外科疾患への応用

良性骨腫瘍2例および大腿骨頭壊死2例に対して、同様の方法で再生医療の臨床応用を行った。骨腫瘍患者の骨髄を人工材のハイドロオキシアパタイト上で培養して、その表面に骨組織を再生させた後に病巣の搔爬部に補填した。骨頭壊死では β TCPの表面に骨を再生させて移植し、血管柄付き腓骨で支持させた。骨腫瘍例の経過は良好で、補填部は再生骨および新生骨で早期に充たされて疼痛も消失していた。骨頭壊死例は現在経過観察中である。

間葉系幹細胞を利用する医療は骨・軟骨組織だけでなく、血管、神経、皮膚など多方面にわたり臨床応用が一部では行われているが、ヒト細胞を使用する研究や臨床応用に関しては安全性のみならず、倫理面での厳しい審査を経て行われることが肝要である。本研究に関して、今日までご指導およびご協力いただきましたTERCの大串 始研究チーム長および所員の方々、当大学公衆衛生学土肥祥子助教授、第1病理学吉川隆章講師に深謝いたします。

寄生虫学教室

寄生虫学講座 教授 石坂 重昭

当教室は、石坂重昭(教授)、吉川正英(助教授)、村田芳明(助手)、王寺幸輝(助手)、美留町潤一(助手)と3名の大学院生にて現在は主に再生医学の分野の研究に精励恪勤しております。寄生虫感染は免疫学的な視点からして異種移植の自然発生モデルであります。そこで、移植を目指し特異的免疫寛容を成立させる寄生虫内の遺伝子の探索に寸進尺退していました折、ヒト胚性幹(ES)細胞の出現は千載一遇の慶事でありました。各自のES細胞をつくりだせれば免疫の問題点は回避でき、移植可能な細胞、臓器をつくるのが期待されます。それ故、4年前より50を過ぎて新たな再生への挑戦を始めました。先ず、マウスES細胞を用いた基礎医学研究というよりも未来医学研究として将来移植医療に役立てたいという思いで開始いたしました。その研究成果を紹介させていただきます。

1) 腸管様器官への分化

マウスES細胞をシャーレの上蓋に水滴状にして培養することにより胚様体を形成すると、内胚葉、外胚葉の細胞へ分化しました。その胚様体を平面培養しますと心筋ができ、あちらこちらで細胞が動きだしました。その心筋からの分化因子により、心筋が拍動を停止した後、その周辺に腸管様の小さな管様のものが蠕動運動し、腸管様の組織構造をしたものがつくられました(Yamada, T. et al., Stem Cells 20, 41-49, 2002)。

2) 膵B細胞, 肝細胞への分化

マウスES細胞から同様に胚様体を形成させた後、平面培養を行いますと心筋ができ、その周辺にアルブミンや肝細胞マーカーが検出され、肝細胞様組織へ分化しました(Yamada, T. et al., Stem Cells 20, 146-154, 2002)。また、同様にインスリン産生細胞へも分化しました(Shiroi, A. et al., Stem Cells 20, 284-292, 2002)。

3) HNF-3 β 遺伝子導入による肝細胞への分化

マウスES細胞に先ず内胚葉へ分化させるためにHNF-3 β 遺伝子を導入し、ハイグロマイシンにてHNF-3 β 発現クローンを取り出し、さらに肝細胞培養培地にてキチンファイバーとともに三次元培養すると、アルブミン、グリコーゲン、補体C3, P450を産生し、かつ高い尿酸合成とトリグリセライド合成をする肝細胞に分化しました。4ヶ月以上も高い代謝機能を維持でき、肝細胞移植への応用が期待されます(Ishizaka, S., et al., FASEB J. 16, 1447-1449, 2002)。

現在、吉川助教授がES細胞から肝臓をつくる研究を進めています[科学研究費補助金 基盤B、萌芽研究にて]。また、王寺助手がES細胞より内耳の有毛細胞に分化誘導する研究を行なっています(若手研究Bにて)。共同研究としましては、脳神経外科教室とパーキンソン病の再生治療の研究、眼科教室との網膜の再生治療の研究を行っています。



ジョージ・ブッシュ大統領のかつての宣言文の中にこのような一文があります。「人間、最も見事で、最も謎めいている。この驚くべき存在について学ばなくてはならないことがまだまだある。」再生医学の伸展の末に人類は一体何をみることになるのでしょうか。わくわくするが、恐ろしくもあります。

紀元前1500年頃のエジプトのスカラベ

写真右から真理(アマト)、生命の復活を知らすヒヒ、永遠の生命(太陽とアング)

化学教室

化学 教授 大崎 茂芳

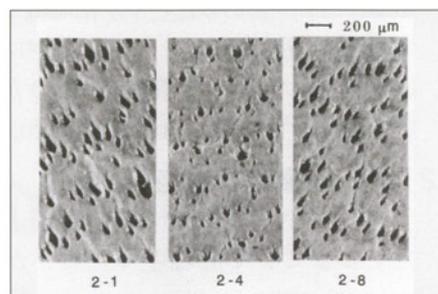
現在の化学教室は、大崎茂芳（教授）、山本恵三（講師）、井手武（助手）の3名体制で研究を行っています。最近の医学の進歩は目を見張るものがありますが、我々の研究は、単に分子レベルにとどまらず、忘れられがちなバルクとミクロの分子レベルをつなぐ領域にも焦点を当てようとしております。

(1) 皮膚や骨でのコラーゲン線維の配向で何が分かるのか？

コラーゲン線維の配向性は、生体の運動機能との関係で非常に重要ですが、適切な測定方法はありませんでした。ところが、線維の配向性を迅速に測定できる世界的に全く新しいタイプのマイクロ波方式を見出し（1990年ネイチャー誌に掲載）、理論を提出するとともに測定装置をも開発し、フィルム、繊維、セラミックスなどに適用してきました。

また、マイクロ波方式を人間の血管や骨、動物の皮膚などの組織に適用した結果、コラーゲン線維の配向分布をも提示することができるようになり、その分布と生体の運動機能や老化とが密接に関係することを明らかにしてきました。また、皮膚移植での"ひきつり"などを解決すべく、移植片とその周辺皮膚におけるコラーゲン線維の方向性をマッチングさせるという再生医学としての新しい移植法を提案しております。さらに、骨に加わる力の分布を明らかにすべく、踵骨におけるコラーゲン線維の三次元配向分布を明らかにしつつあります。これらについては、解剖学の東野義之教授および整形外科の高倉義典教授と連携して研究をしております。

最近、皮膚の毛穴形状からコラーゲン線維の配向分布を決定できる毛穴方式を見出し、それを皮膚移植や老化測定などの臨床現場に適用すべく、装置の開発を行っております。

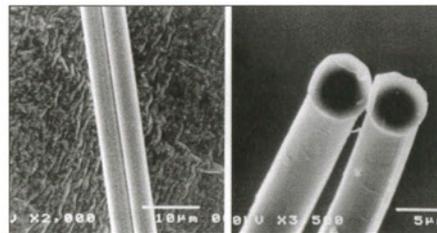


牛革の表面での毛穴形状（線維の向きが判る!）

(2) クモとミノムシの糸は手術用の糸として有効か？

遺伝子工学的にクモの糸を合成し、それを手術用の糸、腱や防弾チョッキとして利用するという話が現実味を帯びてきました。柔軟性があり力学的に強い牽引糸は二本のフィラメントから成り立っており、クモの体重を支えるために命綱とも言われております。牽引糸の一本のフィラメントが切れてももう一本のフィラメントでクモを支えることができ、二本のうち一本は"ゆとり"としての働きをしています。クモの命綱は安全性の観点から最高に効率的なシステムである"2倍則"を見出しました（1996年ネイチャー誌に掲載）。この法則は、エレベーターや橋を設計する際の危機管理、医療事故回避におけるダブルチェック、社長と会長との海外出張で別々の飛行機に乗ることや、記念写真での最低二回撮影のことなど様々なケースでの危機管理の新しい指標として使用できるものです。また、クモの糸から、生物が生きていくために不可欠な信頼性の原点のあることも見つけました。それは、信頼できる人と信頼できない人がパターン化できるとともに、勉学や研究の意味や人事管理などの社会における様々な事例をビジュアル的に説明できることから、その考え方を一般則にまで持っていく予定です。

最近、危険であると言われてきた紫外線がクモの糸を強化することや、ミノムシの糸の力学強度がクモの糸よりも高いということも見出しました。将来的に、これらの糸が遺伝子工学手法によって合成でき、手術用の糸や腱として利用できることを目指して研究しております。



牽引糸の電子顕微鏡写真

(3) 酵素の構造解析、花粉のアレルギー

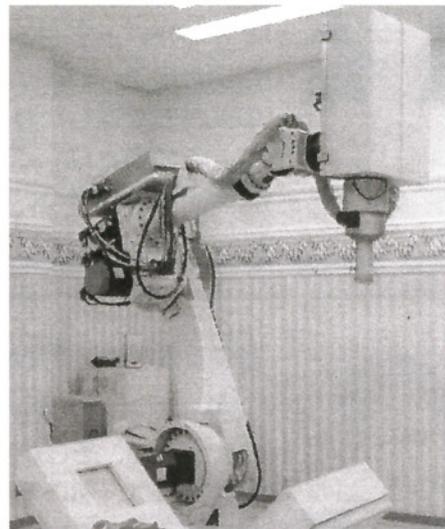
生体にとって酵素は不可欠な存在ですが、その酵素の特異的な機能を明らかにするために、X線法によって酵素の難解な結晶構造の解析を行っております。また、花粉アレルギーの課題に関して、日常生活における花粉防御の実用化対策についての応用研究に積極的に取り組んでいます。

Information

平成14年12月議会補正予算について

◎平成14年12月の定例県議会において奈良県立医科大学費特別会計から補正予算要求したサイバーナイフ設置に係る経費が可決成立いたしました。

サイバーナイフ購入費	599百万円
(仮称)サイバーナイフ棟建設経費	191百万円



サイバーナイフ

①サイバーナイフとは？

サイバーナイフはX線ビームを利用して手術困難な病巣を治療する高精度の定位置放射線治療装置で、患者への負担が大幅に軽減されることとなり、患者サービスについて格段の向上が図れる。

②設置場所

C病棟開設と同時に稼働できるように、現在のMR棟にサイバーナイフ本体を格納する治療棟を増設する。

(総務課)

医学教育等
関係業務
功労者表彰

受賞のお知らせ

大学における医学の教育、研究、患者診療等に関する業務について、特に顕著な功績があったとして、11月26日に本学から次のお二人が文部科学大臣から表彰されました。

吉川恵三子さん(病院第二課 調理配膳係)
西川 清野さん(看護部 ICU)

(総務課)

平成14年度 中島佐一学術研究奨励賞の募集

- ◎募集期間 平成14年12月10日～15年1月24日
- ◎募集要領 『平成14年度中島佐一学術研究奨励賞の募集について』(奨第15号)を参照してください。

若手研究者からの多数の応募を期待しています。

奨励会事務局より

看護短期大学部

看護学実習を終えて

(看護短期大学部看護学科)

看護短期大学部では、学年の進行に応じた実習を展開しています。1年生は基礎看護学実習Ⅰ、2年生は基礎看護学実習Ⅱ、そして3年生は各科別看護学実習で、各段階に応じた課題を実習で学んでいます。



基礎看護学実習Ⅰを終えて 1年 岩田理恵子

初めて患者さんと接して話を聞いて、ナースの存在の大きさを知りました。ナースの暖かい笑顔が忘れられません。患者さんとのコミュニケーションがうまくできるか、とても不安でしたが患者さんのほうからとても暖かく受け入れていただいたので、コミュニケーションがとりやすかったです。でもやはり、患者さんの気持ちを察したり、どのような言葉をかけると安心感を与えられるのか悩みます。このことは、これからの実習で、いつも課題として考えていきたいです。今日の実習の体験で、改めて看護師は素晴らしい仕事だなと思いました。



基礎看護学実習Ⅱを終えて 2年 樋口藍子

8日間1人の患者さんの入院、術前、術後をみる事が出来、大変なことも多くありましたが、そこから学ぶものも多くあったと思っています。特に術後の目覚しい快復ぶりは、私の看護計画の予想を上回るほどに早く、毎日驚きの連続でしたが、日を追うごとに元気になっていく患者さんをみていて喜びを感じました。患者さんの笑顔にこんなに喜びを感じることができるんだと思うと、もっと他に私にできることはないのかなと、患者さんに必要なケアが計画表に毎日埋まっていきました。実習では、ケアの目的を明確化することで、ケアの質が大きく変わることを学びました。ケアの目的を明らかにし、それを分析・解釈することで的確な看護をすることが可能です。そのためにはまだまだ勉強不足であることがわかりました。今回の実習を振り返りながら、来年の実習に向けてがんばりたいと思います。



母性看護学実習で分娩に立ち会って 3年 阪本さやか

新しい命の瞬間を見ることができ、なんともいえない感動を覚えました。産婦さんが陣痛の痛みにも時間耐え、私は痛みが少しでもやわらぐように身体をさすったり、声をかけることしかできなかったけれど、まだか、まだかと思いながら共にがんばってきたので、児頭が見えた瞬間、思わず「赤ちゃんの頭が見えてきましたよ」と大きな声を出してしまいました。本当に命の素晴らしさ、生きるという素晴らしさを感じられたと思います。助産師が落ち着いて、今赤ちゃんはどんな状況なのかを声かけしたり、間歇時に「今力を抜いていいところ、ゆっくり休んでいいよ」という声かけをすることで、母親の不安も軽減できていたと思います。陣痛の痛みにも耐え、産婦さん自身のがんばりしかないけれど、そこで看護者が安楽に向けてどう関わるかが大切なお仕事だと思いました。また、今後どのようにしていくのかを予測して対応していくことの大切さも感じました。

看護短期大学の公開講座

看護短期大学部では、開学以来、年2回の公開講座を実施しています。夏季は看護関係者、秋季は県民の皆さんを対象にしたテーマで取り組んでいます。

今年の夏季公開講座は8月24日（土）13時30分より「家族看護論」のテーマで行われました。講師は小児看護学の江上芳子教授が務め、128名の参加者の熱心な態度に、家族看護に対する関心の深さを改めて実感しました。

また、秋季公開講座は、11月16日（土）13時から「アウトドアでの応急手当」のテーマで行われました。成人看護学の玉田章教授が講師を務め、応急手当法（止血法・固定法・包帯法・搬送法）の講義のあと、実技指導が4つのグループに分かれて行われました。参加者の皆さんは積極的に実技に取り組み、熱心にメモをとったり、質問をする姿が見られました。

（看護短期大学部）



夏季公開講座



秋季公開講座

第34回

全国公立大学附属病院看護部長協議会開催

平成14年10月24日と25日の両日にわたり、本院看護部が当番校として、札幌医科大学医学部附属病院・横浜市立大学医学部附属病院・横浜市立大学医学部附属市民総合医療センター・福島県立医科大学医学部附属病院・名古屋市立大学病院・京都府立医科大学附属病院・和歌山県立医科大学附属病院・大阪市立大学医学部附属病院・奈良県立医科大学附属病院の、全国9公立大学附属病院の看護部長と看護副部長各1名の出席のもと、橿原ロイヤルホテルで開催しました。

議題として

- 1 診療報酬改定に伴う取り組み（主に、クリティカルパスの取り組み状況、褥瘡対策未実施減算に対する病院としての対策、診療報酬マイナス改定に伴う病院経営改善について）
- 2 看護部組織における評価（監査）システム
- 3 新人指導の工夫

を取り上げ活発な情報交換、討議が行われ、有意義に会議を終えることができました。

（附属病院看護部）



チュートリアル風景

チュートリアル教育の現場から

医学教育改革の一環として、本学でも昨年度から基礎医学課程でのチュートリアル教育が行われています。本来のチュートリアル教育で必要とされるチューターの数や準備期間の不足もあり、本学のチュートリアルは、各教室が専門分野内での課題をつくり、一人の教員（チューター）が6～7人のグループを3班ほど担当するという方法で変則的に行われています。成果の発表もプレゼンテーションありレポート提出ありディスカッションありと各教室に任されています。場所は以前の橿原市の伝染病棟を借り、各部屋にコンピューターとプリンタを一台ずつ用意し、基礎の教室から参考図書の寄贈を受けてスタートしました。教員は、すでにチュートリアルを取り入れて成果の現れている岐阜大学医学部より高橋優三先生（本学49年卒）をたびたびお招きして研修を受けて臨んでいますが、講義をする経験の少ない助手層には、学生を正しい方向へ導くだけでも負担は大きく感じられ、逆に教授・助教授・講師の先生は、『内容についての指導をすべきでない』ことに苛立ちを感じ、発表や評価の仕方に頭を悩ませつつも、その一方で学生達との身近な触れ合いを楽しんでもいるようです。学生たちも初めは戸惑いながらも、今までなら試験直前にしか買わなかった教科書を購入し、図書館に足繁く通い、グループ内で雑談を交えながらも討論をしています。出席をきちんと取ってもらう、適当に分担する、発表やレポート提出には命を賭ける？など要領よくこなしていますが、参考図書が足りない、インターネットを活用するにもコンピューターが少ないというハード面の問題や、授業で習っていない範囲が多いのにチューターは何も教えてくれない、出欠の確認とレポート受け取り以外は放ったらかしにされる、レポート提出では少数に負担がかかるだけという不満を抱えています。

チュートリアル教育開始後1年余の昨年11月6日、教員と学生の間でチュートリアルに関する意見交換会が開かれました。学生側からは、グループ内での学生個々のmotivationに差がある、チュートリアルは討論のみの2時間位にして調べ物は各自勝手にやればよい、これまで通り系統だった講義をしてくれる方がよい、評価の仕方が明確でない、教員の求めるところと学生側のレベルの差がありすぎると厳しい意見が出され、教授らからはチュートリアル教育は本来学び方を学ぶためのものであり知識を得るためのものではない事、グループであっても課題を分担するのではなく一人一人取り組み、さらに皆で討論をすることが将来臨床の場でも必要であるという基本理念に立ち戻っての返答がありました。学生の一番の関心事である評価についても「客観的なチュートリアルでの評価法に基づ

いて行く」という答えもあれば、「本来評価すべきものではない」という見解もあり、教員・学生共にいろいろ悩みながら怒りながら、まだまだ試行錯誤を繰り返しながらの変革になりそうです。

この悩める学生たちが医師になり、臨床の場に出たときにどのような力を発揮するか... 乞うご期待!!!

チュートリアル教育とは...

チュートリアル教育とは、自己開発型少人数教育のことであり、数人の学生で一グループを作り与えられた課題についての自主的な学習をし、討論をし、発表をする。チューターが各グループに一人ずつつくが、チューターは内容についての指導をするのではなく、学生たちの学習の方向が本題からそれすぎないように軌道修正をするだけである。従って課題の内容とチューターの専門分野とは関係ないのが普通である。従来の知識伝授型教育ではなく、問題解決型の教育といわれている。

(細菌学教室 水野文子)

「病院ボランティア」にエールを送ろう!!

平成12年3月から「病院ボランティア」が開始され、現在38名の方が活動されています。

院内学級では、児童・生徒たちの学習援助を行い、また正面玄関ロビーでは、外来患者さんたちの手助けなどを行い好評を得ています。

とりわけ、昨年10月からはロビーに「ボランティアコーナー」が設置され、病棟等からの要望にも応え、入院患者さんへの援助も行うなど、積極的に活動されています。

紺色の縦縞エプロンがユニフォームで、あなたの一声がエネルギーとなります。みんなで“エール”を送りましょう。



(病院第一課)

デイルーム美術館



牡丹

附属病院第二本館の各病棟にあるデイルーム（談話室）には、奈良にゆかりのある花をイメージした陶板（縦60cm×横60cm）が飾られています。

B病棟では、心なごむ「鉄線」「八重桜」などの花々が好評を得ていますが、現在建設中のC病棟の各デイルームにも、病気の回復を願う心をイメージした五色の春の花が描かれる予定です。

	テーマカラー	B病棟	C病棟
8階	青紫	鉄線(てっせん)	杜若(かきつばた)
7階	桃紫	藤(ふじ)	紫雲英(れんげ)
6階	酔白	牡丹(ぼたん)	石楠花(しゃくなげ)
5階	ピンク	八重桜(やえざくら)	笹百合(ささゆり)
4階	純黄色	蒲公英(たんぽぽ)	山吹(やまぶき)

(病院第一課)

Report

○ 大学規程の改正状況

(11月12日付承認)

将来計画委員会規程の一部改正

(改正内容)

今日の大学、医学・医療を取り巻く環境の著しい変化に対応し、本学の将来に対して適正な判断を行うためには、将来計画委員会の位置付けがますます重要になることから、次の改正を行った。

- ・ 将来計画委員会委員に部局長を加える。
- ・ 学長、部局長及び事務局長以外の委員は、一般教育、基礎医学及び臨床教育の各協議会の代表者から推薦を受ける。
- ・ 委員会の成立要件として、委員の3分の2以上の出席を明記する。

○ 各種委員会委員の選任及び改選状況

(10月8日付報告)

医の倫理委員会委員の改選

(学長、附属病院長以外の委員)

和中 明生 (解剖学第二講座 教授)
羽竹 勝彦 (法医学講座 教授)
國安 弘基 (腫瘍病理学 教授)
宮川 幸子 (皮膚科学講座 教授)
中村 忍 (総合医療・病態検査学講座 教授)
奥地 一夫 (救急医学講座 教授)
池辺 義教 (本学名誉教授)
米田 泰邦 (弁護士)
星野 一正 (京都大学名誉教授)
大手 信重 (奈良県医師会副会長)
松本 功 (奈良県病院協会会長)
永田喜代子 (奈良県看護協会副会長)

中央標本室委員会委員の一部改選

東野 義之 (解剖学第一講座 教授)
和中 明生 (解剖学第二講座 教授)
市島 國雄 (病理学第一講座 教授)
小西 登 (病理学第二講座 教授)
羽竹 勝彦 (法医学講座 教授)

(11月12日付報告)

組換えDNA実験安全委員会委員の一部改選

大西 武雄 (生物学 教授)
和中 明生 (解剖学第二講座 教授)
米増 國雄 (公衆衛生学講座 教授)

(11月26日付報告)

将来計画委員会委員の改選

(学長、部局長、事務局長以外の委員)

大崎 茂芳 (化学 教授)
山下 勝幸 (生理学第一講座 教授)
小西 登 (病理学第二講座 教授)
福井 博 (内科学第三講座 教授)
榊 壽右 (外科学第二講座 教授)
高倉 義典 (整形外科科学講座 教授)

(12月10日付報告)

ラジオアイソトープ委員会委員の一部改選

小西 登 (病理学第二講座 教授)
大石 元 (腫瘍放射線医学 教授)
越智 保 (中央放射線部 技師長)

バイオセーフティ委員会委員の一部改選

石坂 重昭 (寄生虫学講座 教授)
福井 博 (内科学第三講座 教授)
上野 聡 (神経内科学講座 教授)
藤村 吉博 (輸血部 教授)
堤 雅弘 (腫瘍病理学 助教授)
亀岡 正典 (生化学講座 講師)
三笠 桂一 (内科学第二講座 助教授)



○ 教授選考の状況

本年度、本学では次の4件の教授の選考が進められております。

● 周産期医療センター・新生児集中治療部門教授

平成14年4月、附属病院に設置された同センター教授の選考。

同7月に選考委員会委員を選出し、候補者の公募を行い、11月に教授候補者2名が推薦され、12月に教授会員による投票の結果、高橋幸博氏に内定。

平成15年1月1日付で教授に就任。

● 看護学科の設置に伴う各教授等

平成16年4月開学を目指して、医学部看護学科設置準備委員会で検討が進められている看護学科の教授の選考。

7月に教員選考委員会委員を選出し、教授候補者の公募等を実施し選考作業を行っており、今年度中に、教授を含め全教員の選考を行う予定。

なお、発令は平成16年4月を目途に行う予定。

● 病理診断学講座教授

本年度末に停年を迎える市島病理学第一講座教授の後任の選考に関連し、将来計画委員会に部会を設置し、本学における「病理のあり方」を検討した結果、病理診断学部門における改革が必要との答申を受け、次のような改革案が出されたことに伴う教授の選考。

1. 病理学第一講座を病理診断学講座とし、病院病理部の業務を含む病理診断学の教育、研究に従事（組織機構上は臨床医学に配置）
2. 病理学第二講座は、病理病態学講座とし、基礎病理学の教育、研究に従事（組織機構上は基礎医学に配置）

3. 腫瘍病理学は、従来通り学部の教育、研究に協力するとともに、がんセンターの業務に従事

教授の選考については、平成14年10月に選考委員会委員を選出し、年末にかけて公募を行い、平成15年4月を目途に教授発令の予定。

● (仮称) 医学教育開発・研究センター教授

9月に将来計画委員会に設置された部会で検討が行われている同センターの教授の選考。

（センター構想がまとまり次第、教授の選考について検討される予定）

同センターは、医学・医療の進歩及び社会の変化に即応した教育内容及び教育方法等に関する調査・研究を行い、医学・医療に関する教育の充実と教育水準の向上を図ることを目的として、現在、将来計画委員会に設置された部会において検討が進められているもので、位置付けとしては、医学教育に関して各教室における教育を指導でき、学内を横断的・縦断的にカバーするセンターとなる予定。

検討部会における検討が完了し、教授会で承認された後、教授の選考を行う予定。

○ 平成14年度科研費 （日本学術振興会）の追加採択

〔12月10日付報告〕

基盤研究 (C) (2)

生理学第二講座 助手 門脇 真

同 (C) (2)

外科学第一講座 講師 久永 倫聖

◎第56回解剖慰霊祭の開催



平成14年9月19日大学大講堂において、献体者・病理解剖者の御遺族を招き、白菊会会員並びに来賓や教職員・学生等関係者約400名の参加を得て、無宗教で第56回解剖慰霊祭を開催しました。

式典は厳かに執り行われ、参列者の黙祷に始まり学長祭文奉読、学生代表感謝文奉読と続き、参列者全員による献花の後、学長のお礼の挨拶で幕を閉じました。

本年度の慰霊数は系統解剖29柱、病理解剖35柱の計64柱で、慰霊累計は5,356柱となりました。

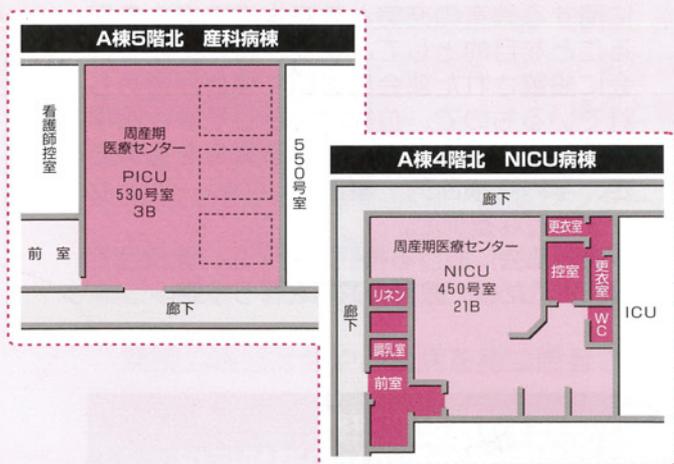
(学生課)

OPEN THE「周産期医療センター」

母胎・新生児の県外搬送の解消等県内における周産期医療の充実を図るため、かねてより整備を進めてきた「周産期医療センター」が、昨年12月19日にオープンしました。

病院本館、A棟5階北の産科病棟に「PICU（母体・胎児集中治療管理室）」3床を新設するとともに、4階北西のNICU（新生児集中治療部）病棟を6床増床し、合計21床としたもので、「周産期医療センター」としての県民の期待に応えていきます。

(病院第一課)



編集後記

学報も2年目に入り、編集体制も軌道にのりつつあります。昨年、本学報の愛称として5件の提案をいただきました。心より感謝いたします。いずれも含蓄のあるものでした。しかしながら、「かくほう」が先行し、いまのところ定着しつつありますので、「かくほう」として発刊を続けたいと思います。ご提案いただきました呼称は、そのイメージに合うコラム、記事等の愛称として利用させていただきたいと計画しております。今年も皆様のご支援とご協力を編集スタッフ一同よりお願いいたします。

再生医療研究会が開催される

昨年12月16日、臨床第1講義室において、「再生医療研究会 第1回研究発表会」が、多くの関係者の参集を得て開催され、本学で行われている同分野の研究の内7件についての発表が行われました。

再生医療研究会とは、本学の多くの教室において進められている、骨髄間葉系幹細胞（MSC細胞）や胚性幹細胞（ES細胞）等を用いたヒト（ES細胞においてはマウス等の実験動物）の骨、皮膚、神経、その他の臓器等の再生についての様々な研究を、本研究会により有機的に結びつけ、より発展させることを目的として、整形外科学講座の高倉教授、寄生虫学講座の石坂教授、公衆衛生学講座の土肥助教授、病理学第一講座の吉川講師、救急医学講座の稲田講師らが中心となって、昨年8月に結成されたものです。

同研究会は、本学における再生医療分野の研究を更に進め、臨床分野における再生治療に取り組んでいくとともに、同研究会を基に大学として、本年度から5年間の予定で関西文化学術研究都市地域で実施される、文部科学省により認定された「知的クラスター創設事業」である「ヒューマン・エルキュープ産業創設のための研究プロジェクト」に参画していくほか、平成15年度から募集される「21世紀COEプログラム」の医学系への申請も計画されています。

(総務課)

編集委員

- | | |
|----------------|--------------|
| ○ 山下 勝幸(生理学第一) | 上田 恵子(母性看護学) |
| 吉田 泰彦(英語) | 南口 昌克(病院第一課) |
| 水野 文子(細菌学) | 柳澤 美穂(学生課) |
| 吉田 克法(透析部) | 大門 喜信(総務課) |
| 植林みどり(看護部) | 田中 章介(総務課) |
- (○印は委員長)